

常呂川流域における農地開発序列に関する研究

共生基盤学専攻 共生農業資源経済学講座 地域連携経済学 目黒 温樹

1. 研究課題

これまで網走農業の経営形態の多様性は、開発過程の地域差によるものとして理解されてきた。しかし、網走農業に関する研究は河川流域の中流部の市町村の分析しか行われておらず、多様な農業生産が行われる網走農業の全体像を示すためには不十分である。本研究では、上流域の農業展開の分析から、網走農業の展開の新たな一類型を示すことを目的とする。

2. 方法

網走農業の展開に関する2つの先行研究を取り上げる。志賀[1994]は集落カードを用いて端野町の農業の展開を整理し、その要因を検討することで網走農業の類型把握を試みたⁱ。坂下[2006]は訓子府町を事例として、地帯内部の地形やそれに規定された開発過程の特徴から農業構造に地域性と多様性を有していることを示し、網走農業の MTS 構造と称したⁱⁱ。本論文では、置戸町の農業展開を集落カードを用いて分析し、これらの先行研究と比較することにより、上流部特有の展開類型を示す。更に端野町・訓子府町・置戸町の近年の農業構造の変化を各種文献・統計資料から分析する。以上の2つの分析から、志賀と坂下を示した常呂川流域の農地開発過程と農業構造の類型的・地域的な発展形を示す。

3. 結果と考察

置戸町では、1960年頃まで冬山造材による兼業収入に依存した半農半林形態の農業が主流であったが、1960年以降は林業の機械化が進み、専業労働力による夏山造材へと変化した。その結果として農家は林業産業から締め出され、急激な農業構造の変化を起し、中・下流部とは異なる独自の農業の展開を見せた。このことから、開発過程が農業経営形態の多様性を生み出す要因となっていた中流部とは異なり、上流部の山村地区では産業構造の変化による影響が重要な要因となり、独自の農業構造を持つと結論づけられる。MTS 構造に新たに最上流部の山村 (F: Forest の頭文字) を付け加え、「MTSF 構造」と称することとする。更に近年の農業の分析から、上流側から順に MTSF 構造の崩壊が進みつつあることが示された。

4. 結論と展望

本研究は網走農業の新たな一類型として、常呂川最上流部の置戸町の農業展開の分析を行い、先行研究との比較から MTSF 構造を示した。また近年の農業の分析から、一部で MTSF 構造の崩壊が進みつつあることを示した。置戸町では地域の存続に向けた取り組みとして、勝山集落で集落の畑作地帯全体を農事組合法人化した「勝山グリーンファーム」の事例等、新たな動きが開始されている。今後、地域農業構造がどのような変化を遂げるかは注目すべき点である。

ⁱ志賀永一「網走地域の農業構造に関する一考察：端野町を事例として」『北海道大学農経論叢』50、1994年、pp. 189-203

ⁱⁱ坂下明彦「地帯構成とその形成要因」岩崎徹・牛山敬二編著『北海道農業の地帯構成と構造変動』北海道大学出版会、2006年、pp. 54-62